

被災・「つながり」1冊に

福島県や日立出身茨城大4年生

東日本大震災から4年。大学生活を通じて、避難生活や復興での地域コミュニティのあり方を学生が見つめた1冊の本が11日、出版される。執筆したのは、福島出身を含む茨城大学の4年生3人。それぞれのテーマで調査研究した。

ゼミの3人11日出版

東日本大震災4年

震災とコミュニティ

「力・限界・可能性」



茨城大学地方政策ゼミナール 編著

志学社

間もなく出版される「震災とコミュニティ」
「力・限界・可能性」

「震災とコミュニティ」
「力・限界・可能性」(志学社)。3人は、同大人文学部の馬渡剛准教授(地方政治)のゼミで、震災復興について考えてきた学生だ。福島県浪江町出身の横山紗希さん(20)は原発事故故

による強制避難でそれまでのコミュニティが崩壊しつつある現状に警鐘を鳴らす。同県郡山市出身の学生

は、岩手県大槌町での避難所運営を左右したコミュニティの存在を描き、日立市出身の学生は、コミュニティを維持する住宅復興の方策を提示した。馬渡准教授は「入学直前に起きた震災について、この4年間、何を考えて調べてきたかの成果だ。今後の復興を担う世代の可能性を示している」と話す。

遠ざかる「ふるさと」痛感

著者の一人で浪江町出身の横山さんは取材に対し「人とのつながりがあることで自分たちの生活が成り立っているんだと気づかされた」と振り返った。コミュニティが維持されれば、災害時でも相互扶助の関係は保たれる。しかし、分散避難だとそれまでの人間関係は希薄になる。コミュニティや受け継がれてきた伝統は先細りするだけだ。自身もそれを痛感する。母親がいる福島市に行くたびに、知らない町に帰省する気分になる。かつての友人ともなかなか会えない。(村田悟)

『朝日新聞』茨城版、2015年3月8日
朝日新聞社に無断で転載することを禁止する。

震災と地域の絆本に

茨城大生 3・11復興へ提言

東日本大震災で被災した福島県や本県出身の茨城大生3人が、それぞれの視点から地域コミュニティの在り方や復興への提言を書いた本「震災とコミュニティ力・限界・可能性」が出版された。3人を教えた同大文学部の馬渡剛准教授(42)は「彼らは復興を担う『3・11世代』。その可能性を少しでも示せれば」と話している。



「震災とコミュニティ」を執筆した茨城大の(左から)遠藤優太さんと村田佳代さん、指導した馬渡剛准教授。水戸市文京

執筆したのは、馬渡准教授のゼミに所属する、いずれも22歳の村田佳代さん(福島県郡山市出身、横山紗希さん(同県浪江町出身、遠藤優太さん(日立市出身)の4年生3人。全員が入学直前に2011年3月11日の震災で被災した。その後、「震災と復興」をテーマにした馬渡准教授のゼミに入り、あらためて大災害と向き合った。

村田さんは、避難所運営に大きな差が出たという岩手県大槌町を訪れ、人と地域のつながりについて執筆。

「(成功した避難所は)以前から住民同士の交流があり、意思の疎通が図られていた」と指摘し、「普段意識しない地域コミュニティがいざというときに力を発揮する」と話した。このほか、横山さん

は故郷・浪江町を題材に、町外コミュニティの活動と課題などを取り上げた。遠藤さんは被災地が直面する住宅問題に対する方策として、インドネシアの津波などで用いられ、住み続けながら拡張できる構造の住宅「コアハウス」を使った復興を提示した。

馬渡准教授によると、同書の企画が持ち上がったのは12年初夏。3年弱をかけて完成にこぎ着けた。くし

は故郷・浪江町を題材に、町外コミュニティの活動と課題などを取り上げた。遠藤さんは被災地が直面する住宅問題に対する方策として、インドネシアの津波などで用いられ、住み続けながら拡張できる構造の住宅「コアハウス」を使った復興を提示した。

(石川孝明)

茨大学生ら被災地の課題 本に

茨城大人文学部の学生3人と馬渡剛准教授（政治学）が、東日本大震災の被災地取材し、今後の課題などをまとめた「震災とコミュニティ 力・限界・可能性」（志学社、税抜き2000円）を出版した。学生3人は震災直後に大学に入学。馬渡准教授は「震災世代とも言える学生たちが、4年間で成し得ることの可能性を示した一冊。ぜひ手に取ってほしい」と話している。同書はB6判、174ページ。計3章で構成し、いずれも同学部社会科学科4年で、馬渡准教授のゼミを受講する村田佳代さん(22)▽横山紗希さん(22)▽遠藤優

地域のつながり、コミュニティ再生…

取材や研究基に執筆



震災後の課題などをまとめた「震災とコミュニティ」を出版した茨城大の遠藤さん、村田さんと馬渡准教授（写真左から）＝水戸市で

太さん(22)がゼミでの研究活動をベースに1章ずつ執筆。馬渡准教授が編集などを担当し、すでに全国の書店で販売されている。

福島県郡山市出身の村田さんは「大槌町から入った地域のつながりを考える」というテーマを選び、岩手県大槌町で活動するNPO法人や住民らにインタビュー。円滑な避難所運営に必要な地域のつながりの大切さを訴えた。

また、横山さんは出身地でもある福島県浪江町のコミュニティ再生を取り上げ、遠藤さんは「復興過程で発生する災害をどう防ぐのか」というテーマで、宮城県内の住宅復興のあり方を調べた。いずれも地域再興の課題に向き合い、解決策を提案している。

【時田備意】

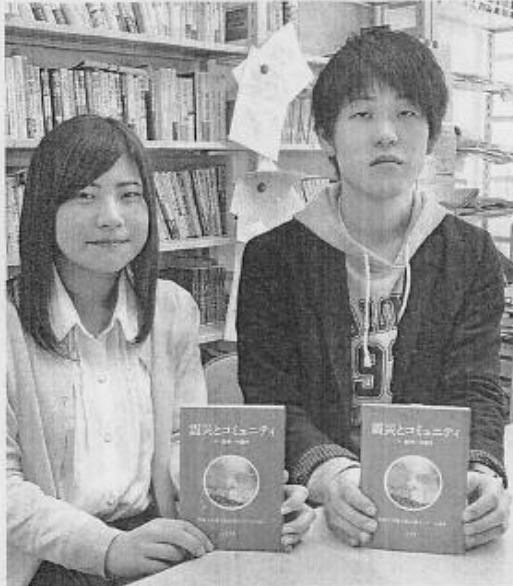
茨城大文学部を24日に卒業する4年生3人が、東日本大震災、東京電力福島第一原発事故後の被災地で起きた地域社会の変化を1冊の本「震災とコミュニティ カ・限界・可能性」(志学社)にまとめた。4年前、入学直前に大震災を体験した「3・11世代」。被災地に正面から向き合い続けた学生生活の集大成を手に、これから復興の先頭に立つ決意だ。(林容史)



共同執筆したのは社会科学部 科地方政治論ゼミの横山紗希さん(三)、連藤優太さん(三)、村田佳代さん(三)。津波と地震で甚大な被害を受けた若手県大稲町と宮城県内、原発事故で住民がまだ帰還できない福島県浪江町を二年にわたり調査研究した。つづきに観察したのは、仮設住宅

きょう茨城大卒業の3人

被災地研究本に



や災害公営住宅で崩壊していくコミュニティ。復旧、復興を進め、人間性を回復する上で不可欠な地域共同の再生方法を模索し、それぞれが

「震災とコミュニティ」を遠くから読み、自身は茨城大に進学して寮生活を始めた。「原発は自分とは関係ない」と思っていた。事故なんて考えもみなかった。「もう、だめなのかな」とあきらめた」と、当時を振り返る。

被災地調査研究「震災とコミュニティ」を執筆した横山紗希さん(左)、村田佳代さん(中)、連藤優太さん(右)。

横山さんは浪江町出身。震災翌日の早朝、「原発で異常」が起きたようだ」と避難指示を受けた。家族四人、避難所の体育館に入りきれず、車の上で寝たりしながら原発から西に逃げた。その後、会社勤めの父は東京の会社に単身赴任となり、母、妹は福島市内にアパートを借り、自身は茨城大に進学して寮生活を始めた。「原発は自分とは関係ない」と思っていた。事故なんて考えもみなかった。「もう、だめなのかな」とあきらめた」と、当時を振り返る。

入学直前震災体験 崩壊するコミュニティ観察

し、次の災害に対応できる態勢づくりを研究したい」一方、日立市に住む連藤さんは、宮城県内の住宅復興の状況から、地域社会を保つには、小さくても住み続けられる自宅を建てるよう主張する。ボランティアとして南三陸町でがれき撤去を手伝った時、「骨を見つけたら教えて」と言われ、多くの人たちが行方不明の現実に気付かされた。避難所生活に疲れ、自殺した若者の死に、「コミュニティの維持に行政の目が向けられていない。若い世代を絶望させてはいけない」と強調する。卒業後は日立市役所に就職、「災害対策関連の仕事がしたい」と意気込む。

研究テーマを提案した馬渡剛准教授(政治学)は「震災を風化させず、ばりばり働いて復興を担う『3・11世代』を育てたかった。目に見えないコミュニティの大切さ、財政支援の必要性について考えてほしい」と話している。

「震災とコミュニティ」は二千元(税別)。県内の書店で注文を受ける。問い合わせは、志学社(電話03(6200)0480)へ。

震災とコミュニティ

—力・限界・可能性—



茨城大学地方政治論ゼミナール 編著

志學社
SHIUGAKU.SHA

震災とコミュニティ —力・限界・可能性—
茨城大学地方政治論ゼミナール編著
志學社

問合せは志學03(6206)0480